

和紙力 桂樹舎

富山県富山市

ステーションナリーの製作で 伝統工芸の技を後世に

江戸時代、富山の薬売りが愛用していた丈夫な八尾和紙。その製造を唯一続けているのが「桂樹舎」だ。日本の古典柄だけでなく、アフリカやアイヌなどの民芸品から着想を得た模様を「型染め」の技術で染め上げた小物は、暮らしを温かく彩ってくれる。



1 ブックカバー、ペン立て、文庫箱など、身近な小物類に八尾和紙を活用する。デザイン性の高さも人気の理由。2 製造工房の隣に併設された「和紙文庫」では、紙の歴史を紹介するとともに、吉田桂介さんが収集した国内外の紙工芸品を収蔵・展示している。

八尾和紙を使った商品を製造・販売する「桂樹舎」のステーションナリーやインテリアは、伝統工芸の枠を越え、おしゃれな雑貨として若者男女を問わず親しまれている。

富山県南部に位置する八尾町では、古くから農家の冬の仕事としてさかんに紙漉(す)きが行われてきた。丈夫な八尾和紙は薬包紙や袋紙、帳簿などに重宝され、江戸時代にはその多くが「越中富山の薬売り」に販売されていた。しかし、明治維新以降に機械漉きの安価な洋紙が輸入されると需要が激減。現在八尾町で和紙の製造を続けているのは桂樹舎一社だけだ。

創業者の吉田桂介さんは、すでに斜陽産業であった八尾和紙を「日本の文化」として残したいと考えて手漉き和紙メーカー「越中紙社」を1946年(昭和21)に立ち上げる。その後、染色工芸家の芹沢銈介氏との交流により「型染め」の魅力に目覚め、国内外の民芸品から着想を得たオリジナルの模様を染色した和紙の製造を開始。そのデザインを生かした札入れや名刺入れなどの小物類は評判を呼び、和紙の加工メーカーとして1960年に「桂樹舎」を立ち上げた。現在は二代目の吉田泰樹さんが、その伝統の技を引き継いでいる。

「和紙は1400年ほどの歴史があり、かつては障子紙、部屋を照らす提灯、唐傘にも使われる生活必需品でした。生活様式の変った今では、和紙がなくても生活に影響はありません。けれど、温かみのある和紙は見ているだけで気分が落ち着きます。歴史ある和紙が過去の産物にならないよう、身近に置いて楽しんでほしいという思いを持っていきます(泰樹さん)」

人気が高まったきっかけは、2003年(平成15)にセレクトショップ「BEAMS」との取り引きが始まったことだった。既存のデザインの中から「特にこの部分を使って、こんな箱を作れないか」など、バイヤーからの提案に応え、BEAMSオリジナルの商品も作った。若者の目に留まるようになると、雑貨店での取り扱いも続々と決まる。その過程で、民芸的な風合いは残しつつも、明るい色味に染めたカラフルな商品が増えていった。

「多くの和紙メーカーが会社をたたむなか、うちが残っていたのは多様な加工製品を作ってきたことに尽きると思います」和紙を広める活動にも長力を投入しており、大人も子どもも楽しめる「紙漉き体験」を何十年も続けている。



一つひとつ筆で色をのせていく「色差し」の作業。色ごとに筆を変え、色を差していく。

「23歳の子は小学生の頃にうちの『手漉き体験』に来て、将来は職人になると決めたそうで、本当にありがたいことです」と泰樹さんはうれしそうに話す。時代のニーズに合わせ、御朱印帳や、書類入れなど新製品を生み出し続けており、今後は八尾和紙の建築資材としての活用も広めていきたいという。

(梶野佐智子)